

資料室だより 109

フランドル楽派の重要性

**New Obrecht Edition** 新オブレヒト全集を2冊購入しました。だいぶ以前に講師の先生から購入希望が出ていましたが、シリーズで揃えることは無理だったので断念していました。今回はたまたま来日していた音楽学者を經由して2冊だけを安く購入することができました。全巻揃わないと意味がないのですが、ないよりはましなので、ご紹介します。

1巻 : Missa Adieu mes amours/Missa Ave regina celorum

ジョスカンの有名なシャンソンに基づくパロディミサとマリア・アンティフォナに基づくミサ曲です。

16巻 : Motets II

こちらには13曲のモテット (O beate Basili, Parce Domini, Regina celi, Salve crux など) が所収されています。Salve regina など3声、4声、6声と3つのヴァージョンがあり大変興味深いものです。モテットはテキストがその時代に新しく作られていたりするので訳が難しい場合もあるのですが、この全集はありがたいことにすべての曲にラテン語・英語の対訳がついています。クリティカルノートも解説もすべて英語です。



フランドル楽派は合唱音楽、特に教会音楽の歴史のなかで最上級の重要性があります。Dufay (1400-1474), Binchois (1400-1460), Ockeghem (c1410-1497), Josquin (c1440-1521), Obrecht (c1450-1505), Issak (1450-1517), La Rue (c1460-1518), などが代表的な作曲家で、当資料室も楽譜を揃えています。Binchois (バンショワ) に関しましてはすぐれたエディションがありますので、以前「資料室だより3」にご紹介しています。

Isaak (イザーク)、La Rue (ラ・リュ) については Corpus Mensurabilis Musicae (定量音楽大全) のなかに全集が含まれており、資料室も所蔵しています。Ockeghem (オケゲム) は3巻本の全集楽譜が、Josquin (ジョスカン) は Smijers 氏による旧全集、そして新全集と揃っています。

どうぞこれらの宗教合唱曲の宝庫をご活用ください。